

1 小中一貫教育が求められる背景・理由

(1) 小中一貫教育をめぐる動向

今日、子どもたちを取り巻く環境は、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境が大きく急速に変化しており、予測が困難な時代となっています。また、核家族や少子化の進行、家庭・地域の教育力の低下なども、依然として大きな課題となっています。

こうした状況から、平成17年に、中央教育審議会は「新しい時代の義務教育を創造する(答申)」において、現在の社会情勢の中で求められる新たな義務教育の姿を示しました。これを受け、平成18年に教育基本法が改正され、「各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を培い、また、国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養う」という義務教育の目的が定められ、続く平成19年の学校教育法の改正においても、小・中学校共通の目標として義務教育の目標規定が新設されました。

その後、平成20年告示の「小学校学習指導要領」「中学校学習指導要領」において、巻末に互いの学習指導要領の全文が掲載されるなど、学校段階間の連携を促進するための工夫が講じられました。

しかし、当初の実態として、小中学校それぞれの教員が、義務教育9年間を貫く視点があったか、また子どもたちの発達の早期化による児童生徒の成長段差*、小学校と中学校との教育活動の差異や、子どもたちの人間関係や生活の変化が同時期に生じることによる子どもたちへの負担、またいわゆる中1ギャップ*などが課題となっていました。

これらの課題に対応するための取り組みとして、全国的に小中一貫教育が広がりを見せ、各地域の実情に応じた実践が進み、それぞれに成果を上げています。

こうした小中一貫教育の取組を、継続的・安定的に実施できる制度として、平成27年6月に9年間の義務教育を一貫して行う新たな学校の種類である「義務教育学校」の設置を可能とする改正学校教育法が成立し、関係政省令、告示と合わせて平成28年4月1日に施行されました。令和元年現在、千葉県内でも2校の義務教育学校が設置されております。

また、平成29年告示の「小学校学習指導要領」「中学校学習指導要領」にも学校段階等間において円滑な接続が図ることが求められています。

【用語解説】

「成長段差」

小学校高学年段階における子どもの身体的発達の早期化や思春期の早まりにより、心理面において自己肯定感や自尊感情について急に否定的になる傾向、学習面において経験的な理解から抽象的な理解へのつまずき等、おおむね小学校4～5年生頃に児童生徒にとっての発達上の段差といった指摘がされている。

(「小中一貫した教育課程の編成・実施に関する手引き」平成28年文部科学省 より)

「中1ギャップ」

子ども達が小学校から中学校への進学に際し、新しい環境での学習や生活に不適應を起こす現象。(「小中一貫した教育課程の編成・実施に関する手引き」平成28年文部科学省 より)

(2) 我孫子市小中一貫教育の歩み

我孫子市の実態調査においても、学力面、生徒指導面、自己肯定感、人間関係等から不安を持っている児童生徒が多数存在しました。

このような現状の中で、我孫子市は「第三次総合計画」の中で、教育の柱として「子どもの創造性と自主性をはぐくむ教育の充実」を掲げ、重点目標を「生きる力の育成」として、バランスのとれた知・徳・体の育成を行っています。また、実態調査からは、市内の教職員は、小中連携について、多少のばらつきはあるものの、これまでも中学校区ごとに行われており、小学校と中学校が協力して取組むことは大切であるという意識を持っていることが明らかになりました。この下地を生かしながら、平成25年度に学識経験者、小中学校の管理職、小中学校の教諭、幼稚園・保育園の職員、小中学校の保護者、市職員からなる「我孫子市小中一貫教育推進委員会」を設置し、我孫子市小中一貫教育の在り方について検討協議を重ね、「我孫子市小中一貫教育基本方針」策定しました。平成26年度には布佐中学校区を推進地区に指定し、モデル地域として先駆けて取組をスタートしました。推進地区として公開研究会を実施し、成果と課題の共有等を行い、他校にも小中一貫の先行きを示すと共に、全市展開に向けて着実に推進してきました。平成27年度には「Abi☆小中一貫カリキュラム」の作成と活用の検証が始まり、令和元年度からは全中学校区完全実施となりました。また、中区ごとのランドデザインも平成30年度末に完成しています。

(3) これまでの成果と課題

これまで実践してきた小中一貫教育を振り返って、教員（一部抽出）からの調査結果をもとに明らかになった成果と課題を整理しました。

①【小中で統一しているスキルが実現しているか】

- ・中区の児童生徒の実態に合わせた独自の環境づくりを実施している。実態の変化に合わせて改案する取組を行っている中区がある。
- ・小中一貫の共通スキルがどの程度実現しているかの質問に、各学校の取組を書く回答が多く、その効果を確定するには至らなかった。

②【目指す子ども像に近づいているか】

①「ふるさと我孫子」を愛し、誇りに思う子ども

- ・Abi☆小中一貫カリキュラムの実施により、我孫子の歴史や我孫子の先人に興味関心が高まっているという回答があった。
- ・我孫子は好きだが「愛する、誇りに思う」までには至らないという回答が複数あった。

②確かな学力を身につけ、夢を持ち、チャレンジする子ども

- ・地域人材を活用したキャリア教育実施の効果を感じるという回答があった。

- ・中区独自で進めている家庭学習の推進で学力向上を目指している。(3中区)
- ・「夢を持ち、チャレンジする」心を判断するのが難しいという回答が多かった。

③自分に自信を持ち、自他を大切にすることも

- ・周囲の人に対して優しくできる児童生徒は多い。
- ・自分に自信が持てない児童生徒が多いとの回答が多かった。

3 【小学校での学習や生活の様子を教員が理解して指導に生かしているか (中学校)】

【中学校での学習や生活の様子を教員が理解して指導に生かしているか (小学校)】

小学校と中学校結果に差はあるが、「ややそう思う」とした回答が多かった。

4 【小学校から中学校への引継ぎが、中学校での指導支援に生かされているか】

- ・中学校の教員は、引継ぎ面談や資料が大いに役に立っているとの回答が多かった。
- ・引継ぐべき情報が十分でない (中学校)、引継いだことが伝わっていなかった (小学校) という回答があった。

以上のような結果から、目指す子ども像を達成するために行ってきた取組による成果は、少しずつではありますが表れています。今後も、これまで取組んできた様々な活動を更に活発に行い、特に小中の交流の場を活かした、教員同士の理解を深めていくことがより一層大切です。これまでの成果と課題を活かした取組、各中学校区の実態に沿った取組を引き続き行っていきます。

一方で、教員の調査により明らかになった主な課題として、我孫子市が目指す小中一貫教育の「目指す子ども像」やそのキーワード(3つの重点)が教員に十分に理解されていないことが挙げられます。これを解消するために、共通の指標を立て、評価や見取りを行い、その結果を次年度に活かす仕組みを確立します。これにより、教員の小中一貫教育への意識の向上と積極的な取組につながると考えます。

今後とも、我孫子市では子どもたちの健やかな成長を願い、小中の教職員が一体となって学習指導や生徒指導等に系統的、継続的に取組み、義務教育9年間の指導を行う「小中一貫教育」を推進していきます。